

つべんにできる野菜をどうするか。困る、というほどでもないが、家に口が二つしかない以上、どうかしないといけない問題の一つである。遠くにいる家族に送る、知人にあげる、いずれも喜んでもらえるのでうれしいのだが、送料を考えるとまったく割に合わないのと、もう側事情も考えねばならぬことなど思うと、やはりできたものは自分でどうにか工夫して食すというのが基本と考える。

十一月は、思いのほか好天続きで、畑に行くたびにぐんと成長している野菜に驚かされた。モンシロチョウが春を喜んでみるみたいに舞っている。抜けるような青空とポカポカ陽気に産む気満々のようだ。

白菜が完成形になってきた。だが育てるのは初めてなので、どのタイミングで収穫したものかわからない。こんな常識的なことを、知らないと自覚するのは案外におもしろく、「あんたそんなことも知らないか」という優位を相手に感じさせつつ謙虚にうかがうときの関係性が心地いい。たいがい教えてくれる人は、こういうときにうんと親切である。

時々立ち寄って、ひとしきりしゃべって帰る近くのおばさんを助言者と定める。聞くと、白菜の結球した部分を上からあるいは横から押さえてみて堅くしまっていたら収穫できるということだった。押さえてみる

とトゲが刺さって痛かった。簡単に食われまいとする白菜の抵抗に遭ったのだ。おばさんは、ぼくの手元を見ながら、「まだ早いやな。もうちょんぼ先で取らない」と言った。

十二月になると、白菜はそれまでの弾力が消えてがっちりとしたたずまいになり、次々と収穫できる状態になった。あれだけモンシロチョウが気持ちよさそうにしていたので、当然外から内に向けてとりどりの穴が空いている。見つける能力は、警戒心に比例しており、虫を極度に恐れる妻が次々と指さし、ぼくが捕殺するという作業をしばらく続けた。ずつしりと重い白菜を持ち帰ると包丁で縦に割り、水のしたたるそれを、ペランダに吊した網に並べる。網の下のコンクリートは芯から噴き出してくる水であつという間にしみが広がっていく。少しでも旨い白菜を食すためには、収穫直後に天日で乾かす、というのが今のところのぼくの最有力仮説だ。保存も利くし。

おとついは、一日干した白菜の四分の一を塩を振った豚肉といつしよに芯ごと入れてコトコト煮た。昨日は、やはり芯といつしよに黄色い部分をだし汁で煮てすり流しにした。どちらも塩だけで十分に旨かった。

白菜は芯を使えばそれだけで旨い。下手すると、ぼくはそれを知らないまま死んでしまうところだった。



專業ババ奮闘記 (その2)126

木幡智恵美

迫りくるコロナ (1)

三月に入った日、県内のコロナ感染者数が百三十人になった。その後も百人前後が続く中、娘から電話が入る。寛大の通う学校の一年から三年までが学年閉鎖になったという。急なことで休まず、玉湯に来て欲しいと言っているので、残り物のおかずをタッパーに詰めて向かった。

娘と実歩、宗矢を送り、寛大とまずは宿題。そのあと、自分で材料を探して銃のようなものを作っていた寛大に、「天気がいいから、十時になったら外へ出ようや」と誘う。

「えっ、先生が外出たらいけんって言ったよ」と返すので、「庭ぐらいいいわね」と連れ出す。縄跳びをしたり、裏山で竹の根っこをほじくったりしながら、小一時間外で過ごした。

昼食後は、何を思ったか、ゴーグルやシュノーケルを付け、部屋で水中探索をしていた寛大。娘から電話があり、寛大の抗体検査をするよう言われたという。早めに仕事を切り上げて帰った娘は、実歩と宗矢を置き、寛大を検査に連れて行った。実歩は縄跳び、宗矢は庭を歩きながら、「はっぱ、はんぶん」「むし、おった」「ちゅんちゅん、おった」「ぶーぶー、いっぱい」としゃべり通し。言葉覚え、発することが楽しくて仕方ない様子だ。

翌日も玉湯行き。いつものように娘、実歩、宗矢を見送り、寛大と宿題をしたり遊んだりして一日過ごす。忠ちゃんが先に帰ってきて、「検査が一杯で、日曜日に結果が出るらしい」と言う。四月に保育所関係者からコロナ感染者が出て、実歩も宗矢も抗体検査を受けているが、結果が分かるのは早かった。あの時は、今ほど感染者数が多くなかったのだ。

翌日曜日の午後、寛大の抗体検査の結果は陰性だったとの連絡が入る。けれども、学校は水曜日までお休みとのこと。月曜日は娘が半日ドックなので、午前中だけ寛大といてくれと頼まれると、「俺が行くわ」と、珍しく夫が買って出た。何もしないことに気が引けたのかもしれない。火、水は娘と忠ちゃん何とかがすると言うのでほっとしていたところ、水曜日の午後、今度は実歩のクラスの関係者に感染者が出たとのこと。実歩も抗体検査を受け、今週一杯クラスが閉鎖だという。すぐに、ライブラリーの図書当番を交代してもらおうよう連絡を入れ、手話教室の代表には欠席の旨を伝える。これまで、恐怖を感じながらも、まだ距離を感じていたコロナが、刻々と身に迫ってきている。

30代フリーター やあ、ジイさん。自民、公明両党が「敵基地攻撃能力」の保有に合意したと報じられている。憲法9条にもとづく「専守防衛」からの逸脱が懸念されている。

年金生活者 目に見える物理的な抑止力を高める代償として、「専守防衛」という目に見えない非物理的な抑止力を弱め、全体として抑止力の低下につながりかねない。

30代 目に見えない抑止力とは何だ。

年金 赤ん坊に危害を加える者はめったにいない現実にとえることができる。ただ、まれにはいるので、親や周りがそれから守ってやらなければならぬ。それに相当するのが自衛隊であり、日米同盟だ。

専守防衛は、先制攻撃をしないのももちろん、防衛力の保持も行使も自衛のための必要最小限にとどめるという日本独自の方針だ。これは自国の武力を低く抑えることによって、相対的に他国の武力を高めることになり、その意味で他国への「武力の贈与」と言え

る。贈与には互酬の原理が働く。贈られた側は返礼をしないではいられなくなる。日本への攻撃を控えることがその返礼に該当する。

これは相手方が力を強めれば自らもそれに応じて強めるという国家の原理に反している。それなのに、日本国民が専守防衛を支持してきたのは、そのメンタリティーに互酬の原理が深く刻み込まれているからだ。この原理が支配していた縄文時代が1万年も続いたことがその理由のひとつと考えられる。

30代 しかし、敵基地攻撃能力の保有には賛成する国民が多い。時事通信の6月の世論調査では、「反撃能力」（敵基地攻撃能力）が「必要」60・9%、「必要ない」19・2%となっている。ロシアのウクライナ侵略で国民の抱いた危機感の大きさを物語っている。

年金 同時に、国家というものに対する国民の態度の変化も示している。

ロシアのウクライナ侵略によって、いま日本国民はこれまで慣れ親しんで

きた互酬原理とは異なる国家原理に遭遇している。日本人にとって、それは慣れない原理を学習する経験でもあるはずだ。必死で学ぼうとするから、原理に過剰適応してしまう。その証拠に、2020年7月の日本経済新聞社の世論調査では、敵基地攻撃能力の保有に「賛成」は37%、「反対」は55%と、現在とは逆だった。

しかし、それは互酬の原理が支配するメンタリティーが弱まったことを意味しない。政府が屋外では外してもいいと言っているマスクをいまだに外そうとしないのも、有給休暇を取るののためらうのに、サービス残業には当然のように従事するのも、自民党を支持しながら、この党の目指す憲法9条の改正には多くが反対するのも、互酬の原理の強さから来ている。時間がたてば、その原理に突き動かされて敵基地攻撃能力に対する態度も変わる可能性がある。

30代 しかし、もうあと戻りしないかもしれない。岸田文雄が来年度から5

年間の防衛費を現行計画の1・5倍以上の総額43兆円とするよう担当閣僚に指示したと報じられている（12月6日朝日新聞朝刊）。記事は「規模ありき」と伝えている。その1週間前には2027年度の安全保障関係予算をNATO並みにGDP比2%にするよう指示もしている。

年金 どんな防衛をするかよりも、どれだけアメリカに忠誠を尽くすかを優先してきたわが国外交の伝統に忠実な振る舞いということが出来る。

それは、国家の設計も運営も他国を真似ることを最優先にしてきた古代以来の日本の政治指導者の態度を受け継いだものだ。唐を真似て律令国家をつくり、欧米の帝国主義諸国を真似て大日本帝国をつくり、果ては真似を通り越してアメリカの言うがままに民主国家をつくった。そもそも国家とは何なのか、肝心なところがわからないがゆえの過剰適応をそれらの歴史に見ることが出来る。そのもとをたどれば、国家原理になじめない日本人のメンタリ

ティーに行き着く。

30代 日本人は国家が嫌いなのか。

年金 何かを贈られたり、してもらったりすると、返礼をしないではいられないのが互酬の原理だ。マスクの着用は他人にコロナウイルスをうつさないためとされる。それは感染防止という行動の贈与にほかならない。贈られた

以上、返礼をしなければならぬ。この場合はそれがマスクの着用だ。そうした贈与と返礼の連鎖は同調圧力と呼ばれた。

互酬の原理は他人に迷惑をかけたくないという心の傾向としてもあらわれる。借りをつくりたくない、借りたらずにでも返さないと気が済まないという心性といつてもいい。有給休暇を取れば職場の同僚に迷惑をかけるから、なかなか取らない。残業を求められたときに自分だけ拒めば、皆に迷惑をかけ、借りをつくることになるから、たとえサービスであつても、しなないではいられない。市場原理が支配しているはずの企業で互酬の原理を貫こうとする態度と言っている。

柄谷行人は互酬原理は「集権的な国家に移行することに抵抗する」と言う。だから「共同体の内部から国家が出てくることはありえない」と（『世界共和国へ』）。このことは現在の日本国民の国家に対する態度にもあらわれている。

ニュース日記 858
中村 礼治

贈与のメンタリティー